

2 D K 夫人

## 2 D K 夫 人

---

ポケット文春 539

〔著者略歴〕 1924年山口県に生れる。現在読売新聞記者。団地に住んで5年、その間団地に関するエッセイを多数発表。著書に「住めば団地」がある。 現住所・東京都杉並区西田町荻窪団地9-204

1964年6月20日 初版発行

定価 220円

著 者 <sup>し</sup>お <sup>だ</sup>塩 <sup>ま</sup>る <sup>お</sup>田 丸 男 ©

発行者 上 林 吾 郎

発行所 文藝春秋新社  
東京都中央区銀座西8ノ4

印刷 凸版印刷  
製本 大 光 堂

---

万一落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

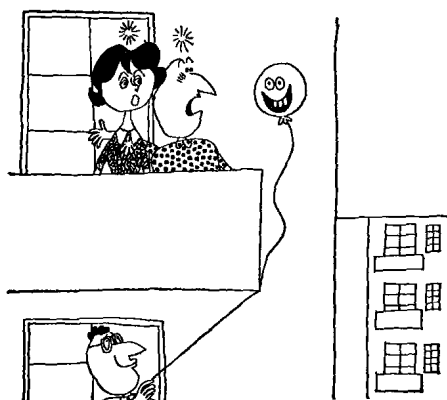
2  
D  
K  
夫  
人

塩  
田  
丸  
男

文藝春秋新社



# 目 次



神話の中のマダムたち 7

パパは何もしない 16

マダムと座談会 28

数字夫人 40

くたばれ！ 集会所 51

閑中忙あり 62

離婚問答 70

マダムは会長さん 88



悲しや幼稚園

団地のSexology

1DK愛情論

合理的ということ

ドアには穴が開いている

ロビイさま、どうしましょう

転居について

ママ、ばんざい！

207

191

172

158

141

129

116

100

カバー  
挿絵  
佐々木侃司  
矢本雄



## 神話の中のマダムたち

だって、そんなバカなこと

「君、このごろ、また一つ言葉癖がふえたね」

大屋君は、両手でひろげて読んでいた新聞をたたんで、そばのテーブルの上にはうり出すと、ふと思いついたように、奥さんの京子さんをふりかえった。

「あら、そうかしら。どんな言葉癖？」

「ほら、その『あら、そうかしら』というのが以前からの君の口癖だったんだけど、このごろは、その次に必ず『だって』とつくんだ。時には『だって、そんなバカなこと！』ときめつけるように言うこともある」

「あら、そうかしら。ちっとも気がつかなかったわ」

「当りまえさ。本人には意識されないから癖になるのだよ。君はいつか、僕が鼻の頭をかいたり、左の小指で額をつついたりする癖があるのを指摘して、癖が多いのは、無意識行動が多い

ということ、頭の具合が大ぎっぱに出来てる証拠だなんてひどいことを言ってたけど、その伝でいけば、君だって、相当大ぎっぱなわけだな」

「あら、だって！ そんなバカなこと」

「ほら、ほら」

大屋君に指をつきつけられた口許を、京子さんは慌てて両掌でおさえた。その恰好がおかし  
いと言って、まず大屋君が笑い出し、それにつられて、京子さんも笑い、ソファーに寝そべっ  
て、『少年マガジン』の漫画を見ていた一人息子の進ちゃんまでが、何だか訳もわからないま  
ま、笑い声を立てる。

日曜日の午後。バルコニーに面した六畳の部屋には、初夏の反射光があたたかい暈をつくっ  
ている。窓の下の庭にはクローバがちりめん波のように揺れている。部屋の中では、ステレオ  
が鳴っている。宿酔がまだ十分にはさめないのだろうか。ねむそうな臉の大屋君。額をちょっ  
と汗ばませて編物をしている京子さん。頬杖をついた進ちゃん。親子三人の、絵に描いたよう  
な「マイ・ホーム」風景である。

大屋君一家が、団地に越してきてから八ヵ月。それまでの住まいが四畳半一間に親子三人、  
その上、隣室との境は襖だけというひどいところだっただけに、大屋君も、京子さんも、団地  
生活の満足度は、目下のところ百パーセントだ。大屋君、三十五歳。M商事の中堅社員、京子  
さんは目下、妊娠五ヵ月、生来の楽天家で、「こんどは女の子だといいいね」という夫の希望に

「大丈夫よ、きっと女の子を生んでみせるわ」と、自分たち夫婦の思いどおりにならないものは何一つないというような顔をしている。大屋家の団欒風景が、住宅公団のPR写真のような具合になるのもやむを得ない、というものだろう。

だが、たった一つ、京子さんにとって気に入らないことがある。彼女に「だって、そんなバカなこと！」という口癖がついたのも、そのせいだ。

それは、一体、何なのか。

団地に移って一カ月目に、京子さんは、女学校時代の友人たちの訪問を受けた。遠来の客を歓迎するために、彼女は温室栽培のメロンをテーブルに供した。その途端、三人の客は顔を見合わせて、にやりと笑った。

「やっばりね」

「何がやっばりなのよ。変な人たちね。薄ら笑いなんかして」

「だって、お宅へ来る途中、みんなで、きっとメロンが出るにちがいないって話しあっていたら、やっばり出たんだもの」

「あら、どうしてメロンが出るにちがいないと思ったの」

「団地に住んでると、どうしても近所と張りあっちゃうでしょ。ことに、あなたなんか昔から負けず嫌いだったから、なおさら……」

「負けず嫌いだとメロンとどう関係があるのよ」

奥歯に物のはさまったような言い方をする友だちの態度に、京子さんはいらいらしながら反問した。ところが、友人の返答は思いがけないものだった。

「チリンチリンのゴミ車の前に、ポリ・バケツを持って行列する時、近所の人に見られても体裁が悪くないように、人參や玉ねぎの切れっぱしはバケツの底のほうに入れ、上のほうにはメロンの皮なんかを並べておくんだって、雑誌に書いてあったわよ。団地マダムの虚栄戦争は苛烈をきわめてるって」

「何ですって、そんなバカなこと！」

京子さんは、思わず大声で怒鳴り返してしまった。「だって、団地の厨芥処理はダスト・シユートですることになってるのよ。ゴミ集めの車の前に行列する必要なんかないのよ。もちろん、だからメロンの皮で体裁をかざるなんてことがあるはずはないわ。でたらめをいうのもいい加減にしてほしいわ」

すっと立ち上った京子さんの劍幕が、よっぽどはげしかったのだろう。三人の客は、メロンも食わず、早々に引きあげていった。

「団地マダムというと、まるで競争心が虚栄という帽子をかぶって歩いているようなものだ。世間は思ってるらしいわ。バカバカしいったらないわ」

その夜、京子さんは、大屋君に三人の客の話を報告したあと、こう言って憤慨した。

団地マダムは、今や、神話の雲の中の存在と化した観がある。彼女たちをめぐって、さまざまな伝説が語り伝えられている。それは、オリンポスの神々をめぐって、おびただしい神話群が発生した有様を彷彿させる。

伝説というものが、非常にしばしば、事実の歪曲と表現の誇張をとまなうものであることは周知のことであろう。その傾向は、神話にしろ、民譚みんたんにしろ、口碑にしろ、そしてまた団地マダムをめぐる挿話、逸話の類にしろ変りはない。

そして、これらの伝説の特徴は、京子さんが指摘したように、虚栄と競争心とを一様に謳い上げている点にある。

たとえば、団地のピアノ・ブームに関して、次のような手のこんだ伝説がある。

ある商人が豊増昇先生の模範演奏によるバイエル全曲のLPレコードを団地に持ちこんで即売したところ、思惑どおり、レコードは飛ぶように売れた。商人は、今さらのように団地におけるピアノの普及度に感心したが、後日判明したところによると、そのレコードを買ったのは、ピアノを持っていない家ばかりだった。ピアノを買う金はない。といって、女の子が二人もいるのに、家の中からピアノの音一つしないのでは幅がきかない。バイエルのレコードでも時々かけていれば誤魔化せるだろう、というはかなき虚栄心が奇現象を生んだというのである。

これが悪質なデマであることはいままでもない。一度、団地を訪れて、コンクリート建築に

おける音響反射の實際がどんなものであるか確かめてみればすぐ分ることだ。

また、こんな伝説もある。

団地のある家で新しい洗濯機を買って、それをバルコニーに置くと、それから一ヶ月と経たぬうちに、その家と同じ棟のバルコニーには、新しい洗濯機がずらりと並ぶ。どこか一軒さえ売りこみに成功すれば、あとは手をつかねても向うから注文がくる。団地はセールスマンにとって天国だという伝説である。

自動車のセールスマンが、某団地のA家に新車を売りこむべく日参していたら、ある日、隣のB家の奥さんから声をかけられた。

「ねえ、お隣りさん、どうしたの。けっきょく車をお買いになるの？」

「ええ、七回ほど通いましたけれど、きょうようやく契約書に判をいただきました」

「そうなの。ところで、その車の納入はいつなの？」

「来週の日曜日の予定になっています」

「それじゃあ、うちも前から車を欲しいと思っていただけけれど、来週の土曜日までに納車してくれるんだったら、この際、思いきって買っちゃうわ。いいこと、絶対に来週土曜日までの納車が条件よ」

ということ、思いもかけず、一台余分にセールスできたという話もある。

このような話が真実だとすれば、たしかに団地はセールスマンの天国にちがいない。だが、

これらの話は真実よりもお伽噺に近いようである。

フランス・ベッドはいらないわ

団地マダムたちが、近隣に対して、はげしい対抗意識を持っていることは事実であるが、対抗意識は必ずしも模倣追蹤の形であらわれるとは限らない。むしろ、その逆の形を示すことのほうが多いであろう。

大屋君は、その証拠を、昨年暮、京子夫人の上に見た。

胸算用より多かったポリーナス袋を得意気に夫人の手に渡しながら、大屋君は、

「これなら、大丈夫買えるね」

といった。買えるといったのは、フランス・ベッドのことである。昼はソファーに、夜はベッドに早変わりするこの特殊ベッドは、京子さんが、「団地に当たたら、何はおいてもまず、ベッドを買ってね」と三年前前から言いつづけてきた、いわば宿願の物であった。それが十分買えるだけの、たんまりのポリーナスなんだと、大屋君は京子さんを喜ばせたのである。

ところが、目的語を省略した大屋君の言葉は、京子さんに通じなかった。

「買えるって、何がですか？」

「何がって、きまってるじゃないか。ほら、フランス・ベッドさ」

「ああ、あれ」

「ずいぶん気のない返事だな。あれほど欲しがっていたくせに、どうしたんだい」

「やめたのよ。フランス・ベッドはもう買わないことにしたのよ」

意外な京子さんの言葉に、大屋君は驚いたが、その変心の理由を聞くに及んで、その驚きは、呆れまじりの感嘆に変わった。

「だってねえ。一週間ほど前、お隣りがフランス・ベッドを買っちゃったのよ。今、うちで買ったら真似したと思われて癩じゃないの。三年も前から欲しかったんだなんて言っちゃって、負け惜しみに聞えるだけよ」

京子さんはこう言うのである。心理学者なら、この時、彼女の上に差別の欲求が作用したのだ、というだろう。

### 伝説ばんざい

団地族になって、まだ八ヵ月しか経たない京子さんだが、それでも、このような伝説のかずかずは、折に触れ、事につけて、彼女の耳にはいった。そのたびに彼女は「だって、そんなバカなこと！」と叫んで、伝説が描く団地マダムの虚像に反発した。それとともに、いつのまにか、その言葉が彼女の口癖になってしまったのである。

京子さんは、

「大体、団地マダムなんて呼方からしていけないわ。有閑マダムは桃色行状記のヒロイン、投



資マダムはへそくりをすって泣きべそをかく女、という調子で、なんとかマダムというと、すぐ笑いものにしようとする悪い癖が日本人にはあるのだわ」

と嘆く。たしかに、彼女の言葉どおり、団地マダムという言葉の使用例は揶揄的なニュアンスをもったものが多い。

しかし、これは本当に憤慨すべき現象なのだろうか。幼稚園の子供が自分の名前を書き違えても誰も笑わない。しかし、大学の先生が、(それがたとえ印度哲学の教授であっても) 因数分解を知らなかったら、ひとびとは大いに笑う。スタンダーは「笑いの条件」と題して「われわれがある人にたいして敬意と尊敬の念を抱けば抱くほど、その人に加えられたごく些細なはずらを、よりよく且つより速やかに理解する。抑圧され、傷つけられたわれわれの自尊心は、われわれよりすぐれていると思っていた人、もしくは、すくなくとも、われわれの優越性のライヴァルだと思っていた人の劣等性をはからずも発見して、えもいわれぬ快感を味わう」(鈴木力衛訳)と書いている。この論法をそのまま借用すれば、ひとびとが団地マダムをしきりに笑おうとつとめているのは、彼らが、本当は団地マダムたちに対して敬意と尊敬の念を抱いていることになる。

団地マダムたちが神話の雲に包まれているのは、非常に喜ばしいことだとは思えないであらうか。